

学生の自己肯定感が教育実習に及ぼす影響について

原田 敬文・室谷 雅美・稲田 達也・大塚 貴之・原田 増廣

Effects of Student's Self-Affirmation on Teaching Practice

Harada Takafumi, Muroya Masami, Inada Tatsuya, Otsuka Takayuki, Harada Masuhiro

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

学生の自己肯定感が教育実習に及ぼす影響について

Effects of Student's Self-Affirmation on Teaching Practice

原田 敬文・室谷 雅美・稲田 達也・
大塚 貴之・原田 増廣

Harada Takafumi, Muroya Masami, Inada Tatsuya,
Otsuka Takayuki, Harada Masuhiro

問題と目的

教員養成課程において、教育実習は不可欠である。幼稚園教員実習に向け、各養成校では、実習に必要な知識、マナー等を「教育実習事前指導」、実習での学びの成果を分析し、次の実習や就職に繋げるために、「教育実習事後指導」の授業を開講している。

しかし、これらの事前指導・事後指導の授業において、子どもや保護者、教員との関わり方に興味を持つ学生がいる反面、学生自身の課題（実習記録が書けるか等）ばかりを気にする学生も多くいる。

本来、教育実習とは、これまでの学習の成果を実践現場で体験し、さらなる課題と将来の展望を持つことを目的としている。

また、実習を受け入れる幼稚園においては、実習生といえども、幼稚園に通う子どもたちや保護者にとって、先生であることに変わりはない。その意味では、実習生は自身のスキルや課題のみならず、子どもたちのよき支援者、指導者であるべきである。

しかし、実習先に訪問指導に行くと、学生のマナーや礼儀など、社会人としての素質、また、意欲や態度といった点についての指摘を受けることも少なくない。これらの点は、授業内容だけで補えるものではなく、学生自身の素質も大きく関係していると考えられる。

また、教育実習に取り組む学生の中には、実習にどのように取り組み、どのような体験をしたいかというよりは、学生自身がどのように評価されるか、園の子どもや先生とうまく関わることができるかなど、自分自身の問題を提起する学生も少なからずいる。

本来、教育者とは、子ども達の成長を一番に考え、成長を祈りつつ、教育的支援や指導を行うべき者である。

昨今の教育現場においては、教員による不祥事、教員の資質が影響する教育問題も多く存在している。

そこで、将来の良き指導者である教育実習生に対し、教員を養成する過程のなかで、学生にどのような資質を備えればよいのかということ

を、学生の自己肯定感の関連とともにあきらかにし、教育実習意義について検証する。

このことにより、教育実習に送り出す前に、幼稚園教諭養成校として、どのような教育活動が必要なのかをあきらかにしたい。

本研究では、自己肯定感の高い学生と低い学生の実習記録の内容を検討し、実習での学びを明らかにすることを目的とする。

方 法

1：対 象 者 幼稚園教諭養成課程に属する短期大学、専門学校 学生53名

2：調査時期 平成28年度5月～8月

3：調査方法

幼稚園教育実習前に、平石（1990）により、『青年期における自己肯定意識の発達のあるり方を検討するため』で作成された自己肯定意識尺度を用いて、5件法で回答を求めた。

その後、「幼稚園教育実習」として、4週間の幼稚園教育実習を行い、幼稚園教育実習簿を提出させた。

幼稚園教育実習の前に回答を求めた自己肯定感尺度の各因子（「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」、「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」）の高群／低群（上位、下位33％）の学生を抽出し、当該の学生の実習記録の記述を保育士養成の専門学校教員、幼稚園教諭養成の短期大学教員、元高等学校教諭（教育実習担当）、児童学系の大学院修了者の4名で検討した。

結 果

自己肯定感尺度「自己受容」因子が高群の学

生は、幼稚園側に情報を提供するための実習生自身の情報や抱負、決意を示した「実習生カード」において、学生自身の長所や短所を的確に述べる傾向が強かった。

しかし、自己肯定感尺度「自己受容」因子が低群の学生は、「実習生カード」において、学生自身の情報には触れず、「実習をがんばりたいです」、「子ども達と仲良くなりたいです」といった抽象的な表現が多かった。学生が自分自身をどのように理解し、受け止めているか、また、それを周囲にどのように伝えようとしているかが大きく影響していると考えられる。

この結果から、自己受容の高い学生は、自己受容の低い学生よりも、自己開示をしていることが示唆された。

自己肯定感尺度「自己実現的態度」因子が高群の学生は、日々の実習記録の中の「感想・反省」の欄に、次の日に向けた学生自身の課題設定や、課題を解決するために幼稚園側に求めたこと等の記述が多く見られた。

また、自己肯定感尺度「自己実現的態度」因子が低群の学生は、日々の実習の感想にとどまり、実習を継続する中で、課題に取り組む姿勢が低いことがわかった。

このことにより、自己肯定感の「自己実現的態度」因子が高い学生は、実習の中で自らの目標を設定し、その進捗状況を自己確認しながら、実習に臨んでいることが明らかになった。

一方、自己肯定感の「自己実現的態度」因子が低い学生は、実習の中で自らの目標を設定していても、その進捗状況について、日々の実習の中で意識していなかったり、当初より、学生自身の思いとはかけ離れた目標になっており、

日々の成長を感じながらの実習をすすめられていないことが読み取れた。

自己肯定感尺度「充実感」因子が高群の学生は、日々の実習記録の中の「感想・反省」の欄に、学生自身が成長したこと、うまく取り組めたことなど、学生自身が主体的に感じた記述が多かった。

また、自己肯定感尺度「充実感」因子が低群の学生は、日々の実習記録の中の「感想・反省」の欄には、教諭や保護者、子ども達のできていないことなど、自身の行動ではなく、周囲に対して批判的なことや、自身の行動に対して周りから受けた影響などに関する記述が目立った。

このことは、自己肯定感尺度「充実感」因子が高い学生は、主体的に実習に取り組むことができていると考えられる。一方、自己肯定感尺度「充実感」因子が低い学生は、実習に対する態度が能動的ではなく、受動的なものとしてとらえていることを示している。

自己肯定感尺度「自己閉鎖性・人間不信」因子が高群の学生は、日々の実習記録において、自身の行動や課題ではなく、園の一日の流れを並べて書いているだけのものが多かった。

また、自身の行動や言動がどのように周囲に影響したかではなく、日々の園活動の中に、学生自身が合わせて行動していることを示唆する表現が多かった。

対して、自己肯定感の「自己閉鎖性・人間不信」因子が低群の学生は、日々の実習記録において、園の流れの中で、自身がどのように影響したか、また、学生自身の行動が、子ども達や先生方にどのように受け止められたかを、学生自身が考え、自身の解釈を述べる記述が多くあ

った。このことは、自己肯定感の「自己閉鎖性・人間不信」は、学生のコミュニケーション力にも大きく影響していると推察されるが、自己の閉鎖性を解き放ち、自己開示を進めさせることが、学生のコミュニケーション力を高めることにつながることを示唆された。

教育実習において、自己の閉鎖性を解き放ち、他者との関係を深めることができることが、より充実した実習につながることは言うまでもない。しかし、普段の学校とは違う、実習先での取り組みは、実習先での孤独感につながり、自己閉鎖性に影響を与えていることも考えられる。

自己肯定感尺度「自己表明・対人的積極性」因子が高群の学生は、実習記録の中で、学生と他者との関わりについての記述が多かった。学生の声掛けで、子どもたちがどのように反応してくれたか、また、園の先生に対して、自分の行動について助言を求めるなど、教育実習を人とかかわりの中でき有意義にすすめている姿が見受けられた。

自己肯定感尺度「自己表明・対人的積極性」因子が低群の学生は、実習記録の中では、学生自身のうまくいかなかったことなどの記述がきわめて少なかった。そこで、実習巡回に行った教員記録と合わせて検討してみると、実習巡回教員が園から聞き取った課題や問題について、実習記録から漏れている点が多くあった。おそらく、学生自身の失敗や課題を記述することをさけて、記録を作成しているのだと考えられた。

自己肯定感尺度「自己表明・対人的積極性」は、ありのままの姿を子どもや園の先生方に見てもらおうという姿勢につながるのである。

自己肯定感の「被評価意識・対人緊張」因子が高群の学生は、実習記録の中で、自身の感想や反省ではなく、園の先生や保護者からの言葉をそのまま記述している学生が多かった。また、その中でも、周囲にどのように思われているかばかりを気にしている様子もうかがえた。

対して、自己肯定感の「被評価意識・対人緊張」因子が低群の学生は、実習記録の中で、先生や保護者からの言葉を、学生なりに解釈し、反省を記述していた。助言をもらうことを、自己の成長として捉えている面が強く、園の先生の指導でわかりづかったことに関しても、さらに、質問をしたり、学生なりの考えを記述し、問い合わせる記述も多かった。

自己肯定感の「被評価意識・対人緊張」は、周囲の評価を通じ、自身をどのように受け止めるかに大きく関係している。これは、他者からの助言や指導を、自身の成長にどのようにつなげられたかと大きく関連している。

昨今の学生の中には、助言や指導を、自己否定ととらえがちで、実習受け入れ側の園よりも厳しいお言葉をいただくことがある。

本来、実習というものは、これまでの学びを体験によって評価を受け、課題を見つけ、次の学びに活かすことが目的である。その意味では、他者からの助言をどのようにとらえるかは重要である。

考 察

今回の調査では、自己肯定感が高い学生ほど、実習記録の内容は、「園の先生との関わり」、「子ども同士の関わり」、「保護者との関わり」といった、他者との関係に関するものが多く、

対人援助の仕事を行う素質があることが示唆された。

一方、自己肯定感の低い学生ほど、「服装や礼儀」、「実習記録の書き方」等、自分自身への課題が多く書かれており、対人援助の仕事を行う上での、広い視野が欠如していることが懸念された。

また、教育実習に取り組む前の不安として、実習先でうまく人間関係を築くことができるかが大きな要素だという学生が多い。

本来教員とは、対人援助の仕事であり、いかなる場面においても、良好な人間関係を構築することが求められる。

本研究で明らかになったことは、自己肯定感の高い学生ほど、教育実習を有意義に進めているということである。

自己肯定感の高い学生は、学生自身の課題を明らかにしつつ、他者との関わりのなかで、さらに課題を見つけ出し、教育実習での日々の体験や学びを積み上げ、教育実習を効果的に進めることができている。

一方で、自己肯定感が低い学生は、日々の実習に取り組む態度が十分に醸成できておらず、一人で悩んだり、失敗を受け止める傾向にあり、次の学びの機会として捉えていないことがあきらかになった。

現在、教員養成校においては、「教育実習事前指導」として、実習指導案の記入方法、実習記録の書き方、設定保育の進め方、子どもの関わり方を指導している。

しかし、本研究の結果からみると、これらの学習以前に、学生自身が主体的に実習に取り組む姿勢を身につけさせることが必要である。

実習に臨む学生が、自己肯定感を十分に醸成しておくことこそが、教育実習の本来の目的に到達し、将来のよき教育者を養成することにつながる。

各養成校で行われている教育実習事前指導、教育実習事後指導の授業においては、実習に対するマナーや礼儀、実習記録の書き方の指導にとどまらず、学生の自己肯定感を高める工夫も必要である。

今回の研究では、自己肯定感が教育実習に対し、大きな影響を与えることを明らかにすることはできたが、どのような授業や指導が、自己肯定感を高めるかということまでは、あきらかにできなかった。

今後の課題として、どのような授業が学生の自己肯定感を高めるかを明らかにしたい。

参考文献

平石賢二（1990）「青年期における自己意識の発達に関する研究」名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科、37、217-234.

市川伸一（2001）「学習意欲の心理学」PHP新書、pp. 46-61

鯨岡峻（2002）『〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ』日本放送出版会本文

